



15 代会長 江崎保男 EZAKI Yasuo

歴史に学ぶ

現在の日本鳥学会は、鳥類を材料として科学を行なう人々の集団であり、学問分野の異なった多様な人々の寄り合い所帯である。こう言う聞こえが良くないが、このことは、20世紀前半には未だ博物学的色彩の濃かった日本の鳥類をめぐる研究が、この半世紀の間にそれぞれの学問分野において科学として適応放散していった結果であり、日本鳥学会の急速な近代化の証だと考えられる。

とはいえ、鳥学会がその名と科学的責務を負っている統一体としての鳥類学あるいは鳥学とはなにか、しばし立ち止まって考える必要がある。まず、鳥学会の英語名称は The Ornithological Society of Japan なので、鳥類学であれ鳥学であれ、それらが Ornithology であることは間違いない。では、Ornithology とは何なのか？そこで、ある欧米人著者による「鳥類学 Ornithology」という本の目次を開くと、そこには鳥の起源から形態・機能・行動・生態・保全まで、つまりは鳥の科学のほぼすべてが語られているという事実にあらためて気付かされる。つまり私たちが、各自の専門領域に属するものだと自負しているに違いない、鳥に関する科学的な知見を一人の著者が総合的およびシステムティックに語る、それが Ornithology なのである。

現在の日本鳥学会に、上記の意味での Ornithologist がどれだけいるのかと問うと、必ずしも肯定的な答えは返ってこないであろう。ある意味、20世紀前半までの博物学の時代においては、多くの会員が Ornithologist だったと言えるのかもしれない。彼らは当時の鳥に関する多方面の知識もっていたと想像されるからである。しかし博物学は、「枚挙の学」といわれるように、Ornithology を行なう必要条件である「知識」を有していたものの、それらを科学に統合する「理論」を持たなかった。科学を行なう理論を手にしたいま、鳥類科学の総

合としての Ornithology を進める十分条件をも、日本鳥学会は手にしたと考えられる。今後、鳥類を材料とする諸科学の切磋琢磨の場としての学会のさらなる発展はもちろんのこと、科学的な Ornithology の発展も期待できることになる。

話はわかるが、現代において、欧米の学術誌に英語で論文を発表することは、ごくあたりまえのことになった。しかし30年前には、このことは普通ではなかった。ある時代に、Ibis や Auk といった英米のいわゆる一流誌に対して、このことが数人の日本人研究者によって、初めて為されたのである。そして、いったん壁が破れるとあとはそのことが普通になるという歴史の普遍が、その後展開されたと考えられる。そして、ここで重要なことは、このことの本質が決して研究者の英語能力の問題ではなかったということである。むしろあるレベル以上の英語の読み書き能力が不可欠であったにしても、壁を破るに必要なことが研究内容のオリジナリティ・独創性にあったことは間違いない。なぜなら長い歴史をもつ欧米の科学者たちが、オリジナリティのない新興国の論文をたやすく受け入れるはずはないからである。そしてこのオリジナリティが、西洋の影響を強く受けながらも、日本語特有の思考で、科学の「言葉」と「概念」をつくってきた先人たちの基盤上に立脚していたことを認識しておく必要がある。なぜなら私たち日本人は日本語でものを考えているからであり、英語と日本語はまったく違うからである。また日本語が西洋の諸言語とならんで、科学をおこなえる世界中で数少ない言語であることも承知しておく必要がある。そして科学の歴史を知らずに、独創的な科学を行なうことはほぼ不可能なのである。100周年を契機に、日本の鳥類学の歴史にあらためて目を向ける必要がある。「歴史に学べ」である。